

2025年11月20日

2026年度 野球規則改正

日本野球規則委員会

I. 2025年 米国オフィシャル・ベースボール・ルールの改正に伴う規則改正

(1) 5.02(c) を次のように改める。

① (i) の「投球動作および」を削除する。

② (ii) を次のように改める。(下線部を改正)

投手が打者に対して投球のためにボールが手から離れたとき、4人の内野手のうち、2人ずつは二塁ベースの両側に分かれて、両足を位置した側に置いていなければならない。

③ ペナルティ前段を次のように改める。

本項に違反した内野手が、投球後最初にボールを触れた場合、打者はアウトにされるおそれなく、安全に一塁が与えられ、各走者もアウトにされるおそれなく、1個の塁が与えられる。ただし、打者が安打、失策、その他で一塁に達し、しかも他の全走者が少なくとも1個の塁を進んだときには、規則違反とは関係なく、プレイは続けられる。

本項に違反した内野手が、投球後最初にボールを触れた内野手でなければ、投手の投球にはボールが宣告され、ボールデッドとなる。

④ 【ペナルティ原注】を追加する。

【ペナルティ原注】本項のペナルティが宣告されてもプレイが続けられたときは、そのプレイが終わってからこれを生かしたいと監督が申し出るかもしれないから、球審はそのプレイを継続させる。打者走者が一塁を空過したり、走者が次塁を空過しても、〔5.06b3 付記〕に規定されているように、塁に到達したものとみなされる。

II. 米国オフィシャル・ベースボール・ルールズとの比較検討により再確認した項目の改正
(主にこれまで不記載としていた項目の追記および文章の修正)

(2) 5. 06 (c) (7) 【原注】の最終段落に次を追加する。

野手が、走者をだます目的で意図的にボールをユニフォームの中（たとえばズボンのポケットなど）に隠した場合、審判員は“タイム”を宣告して、すべての走者に、そのような行為を行なった瞬間にすでに占有していたと審判員が判断した塁から少なくとも1個の塁を与える。

(3) 5. 07 (a) (1) を次のように改める。

① ①の冒頭を次のように改める。(下線部を改正)

打者への投球に関連する動作を起こしたならば、中断したり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。

② 【注】を次のように改める。(下線部を改正)

投手が投球に関連する動作を起こして、身体の前方で両手を合わせたら、打者に投球すること以外は許されない。したがって、走者をアウトにしようとして塁に踏み出して送球することも、投手板を外すこともできない。違反すればボークとなる。

(4) 5. 07 (a) (2) を次のように改める。

① ②の冒頭を次のように改める(下線部を改正)とともに、「(ストレッチとは、腕を頭上または身体の前方に伸ばす行為をいう)」を削除する。

打者への投球に関連する動作を起こしたならば、中断したり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。

② 【注1】を次のように改める。(下線部を改正)

(1) (2) 項でいう“中断”とは、投手が投球に関連する動作を起こしてから途中でやめてしまったり、一時停止したりすることであり、“変更”とは、windアップポジションからセットポジション（または、その逆）に移行したり、投球動作から塁への送球（け

ん制) 動作に変更することである。

- ③ 【原注】の最終段落に次を追加するとともに、【注6】、【注7】を追加する。

ただし、打者が打席に入る前に、投手がwindアップポジションで投球する旨を審判員に伝えた場合には、前述のような投球姿勢であったとしても、windアップポジションとして投球することができる。

投手は、打者が打撃中であっても、(i)攻撃側チームにプレーヤーの交代があったとき、または(ii)走者の位置が変わったときは、次の投球を行なう前であれば、審判員にwindアップポジションで投球する旨を伝えることができる。

【注6】windアップポジションとして投球する旨を審判員に伝えた後であっても、攻撃側チームのプレーヤーが交代したり、走者の位置が変われば、セットポジションに戻ることができる。

【注7】アマチュア野球では、セットポジションに戻るときも、審判員にセットポジションで投球する旨を伝えなければならない。

- (5) 5. 07 (d) を次のように改める。(下線部を改正)

投手が、ストレッチを起こしてからでも、打者への投球動作を起こすまでなら、いつでも塁に送球することができるが、それに先立って、送球しようとする塁の方向へ、直接踏み出すことが必要である。

- (6) 5. 09 (b) (7) を次のように改める。

- ① 本文を次のように改める。(下線部を追加)

走者が、1人の内野手の股間または側方を通過する前で、さらに他の内野手が守備する機会がない状態のフェアボールに、フェア地域で触れた場合。(E. 06c6, 6. 01a11 参照)

この際はボールデッドとなり、打者が走者となったために次塁への進塁が許された走者のほかは、得点することも、進塁することも認められない。

インフィールドフライと宣告された打球が、内野手を通過する前で、さらに他のいずれの内野手も守備する機会がないと判断される前に塁から離れている走者に触れたときは、打者、走者ともにアウトになる。

- ② 【注2】を次のように改め（下線部を改正）、【注3】を削除し、【注4】以下を繰り上げる。

塁に触れて反転したフェアボールに走者が触れた場合、フェア地域またはファウル地域に関係なく、その走者はアウトになり、ボールデッドとなる。

- (7) 【5. 10 原注】の第5段落として次を追加する。

監督またはコーチがマウンドに行った際、投手が他の守備位置に移ったかどうかに関係なく、そのイニングでその投手のもとへ1度行ったことになる。

- (8) 6. 01 (a) (8) を次のように改める。（下線部を改正）

三塁または一塁のベースコーチが、走者に触れるか、またはつかんだりして、走者の三塁または一塁への帰塁、あるいはそれらの離塁をアシストしたと審判員が認めた場合。

- (9) 6. 01 (h) 【付記】を次のように改め（下線部を改正）、末尾に【6. 01h 原注】として「定義50オブストラクション【原注】」を移行する。

捕手はボールを持たないで、得点しようとしている走者の進路をふさぐ権利はない。塁線（ベースライン）は走者の走路であるから、捕手は、ボールを処理しようとしているときか、すでにボールを持っているときだけしか、塁線上に位置することができない。

- (10) 6. 02 (a) (1) を次のように改める。（下線部を改正）

投手板に触れている投手が、投球に関連する動作を起こしながら、中断したり、変更したりして投球を完了しなかった場合。

Ⅲ. その他、日本野球規則委員会で協議した項目の改正

(「プロ野球・プロフェッショナルリーグ」表現の削除、修正。【注】の追加、修正等)

(11) 3. 02 (a) を次のように改める。

① 【付記】の「プロフェッショナル野球（公式試合および非公式試合）」を削除する。

② 【注1】を次のように改める。(下線部を改正)

NPBでは、金属製バット、木片の接合バットおよび竹の接合バットは、コミッショナーの許可があるまで使用できない。

③ 【注2】を次のように改める。(下線部を改正)

アマチュア野球では、使用できるバットについては、所属する団体の規定に従う。

(12) 3. 02 (d) を次のように改める。

① (d) 着色バットは、規則委員会の認可がなければ使用できない。

② 【注1】、【注2】を統合し、次のように改める。

【注】我が国では、所属する団体の規定に従う。

③ 【3. 02注】を追加する。

【3. 02注】我が国では、本項(a)、(b)および(d)または各所属団体の規定に違反しているバットは試合から取り除かれ、そのバットを使用した場合は(c)【付記】および同【原注】後段を適用する。なお6.03(a)(5)規定のいわゆる改造バットについては、同項記載のとおりである。

(13) 3. 03 (j) 【注1】を次のように改める。(下線部を改正)

【注1】NPBでは、本項を適用しない。

(14) 3. 08本文の「プロフェッショナルリーグでは、」と(b)の「メジャーリーグの」を削除する。

(15) 3. 09本文の「本条は、プロフェッショナルリーグだけに適用される。」と、【付記】の「プロフェッショナルリーグ用の」と「プロ野球」を削除し、【注4】を次のように改める。

【注4】我が国では、所属する団体の規定に従う。

(16) 4. 03 (e) に【注】を追加する。

【注】我が国では、天候状況によっては、30分を待つことなく試合を打ち切ることができる。

(17) 5. 08 (b) 【注】の最終段落を次のように改める。(下線部を改正)

打者走者または三塁走者が進塁に際して塁に触れ損ねた場合は、守備側のアピールがあったときだけ、審判員はアウトの宣告を下す。

(18) 5. 10 (e) に【注】を追加する。

【注】アマチュア野球では、所属する団体の規定に従う。

(19) 5. 10 (g) (2) に【注】を追加する。

【注】我が国では、本項にある“イニングの初めに準備投球を行なった投手”を“イニングの初めに投手が、ファウルラインを越えてしまえば”と置きかえて適用する。

(20) 5. 10 (k) 【注2】を次のように改める。

【注2】我が国では、ベンチあるいはダッグアウトに入ることのできる者については、所属する団体の規定に従う。

(21) 5. 10 (1) 冒頭の「プロフェッショナルリーグは、」を削除する。

(22) 【7. 0 2注】を次のように改める。

【7. 0 2注1】NPBでは、本項を適用しない。

【7. 0 2注2】アマチュア野球では、所属する団体の規定に従う。

(23) 8. 0 1 (b) を次のように改める。(下線部を改正)

各審判員は、所属する団体の代表者であり、本規則を厳格に適用する権限を持つとともに、その責にも任ずる。審判員は、プレーヤー、コーチ、監督のみならず、クラブ役職員、従業員でも、本規則の施行上、必要があるときには、その所定の任務を行なわせ、支障のあるときには、その行動を差し控えさせることを命じる権限と、規則違反があれば、規定のペナルティを科す権限とを持つ。

(24) 【9. 2 2注】を次のように改める。(下線部を改正)

NPBでは、“組まれている試合総数”を“行なった試合数”に、“マイナーリーグ”を“ファーム・リーグ”に置きかえて適用する。数の算出にあたり、端数は本条(a)(b)各【原注】に準ずる。

(25) 定義38(2)の「リターン」を削除する。

(26) 定義64の「RETURN」と「リターン」を削除する。

(27) 次の項目の「打者」の表記を「打者走者」に改める。

5. 0 6 (b) (4) (G) 【規則説明】

5. 0 6 (b) (4) (I) の4行目

5. 0 8 (b) の4行目

5. 0 9 (b) (1) (2) 【原注】 1つ目の例の3行目

5. 0 9 (b) (6) 【原注】 の5行目と8行目

5. 0 9 (c) (2) 【原注】 2つ目の例の2行目

9. 0 5 (b) (4)

9. 1 2 (f) (1) ①

定義28「フィールダースチョイス」

定義30「フォースプレイ」【原注】 1つ目の例の2行目と6行目

以 上

2026 年度 公認野球規則改正の概要

公益財団法人全日本軟式野球連盟

	規則	改正のポイント
1	5.02(c)	<ul style="list-style-type: none"> ・内野手の守備位置制限に関する規定 (2023 年 OBR 改正) ・4 人の内野手が投球前に位置しなければならないタイミングを原文記載のとおり表記 ・2025 年の OBR 改正により、違反した場合のペナルティについて、その違反した内野手が投球後最初にボールに触れた当事者であった際、攻撃側に有利なプレイで続かなければ、投球を無効にして『その打者および塁上の各走者に 1 個の塁を与える』ことになる。(従来は、当事者か否かに関係なく『1 ボール』のペナルティ) ・【注 2】のとおり、引き続き我が国では適用しない
2	5.06(c) (7)【原注】	<ul style="list-style-type: none"> ・野手が打球や送球のボールをユニフォームのポケットの中などへ意図的に隠す行為をした際の規定 ・2019 年に OBR で改正され、【原注】の内容が追加された ・このような行為があったと審判員が判断した場合、直ちにボールデッドとして、その時点で占有していた塁から各走者に少なくとも 1 個の塁が与えられることが明文化された
3	5.07(a) (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・windup position に関する表記の修正 ・該当箇所につき、OBR 『any natural movement associated with his delivery of the ball to the batter』という記載のとおり表現に合わせた文言とした ・規則適用に変更はない
4	5.07(a) (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・セットポジションに関する表記の修正 ・上記「3」と同様、OBR 記載のとおり文言とした ・ストレッチに関する括弧書きの説明については OBR にも記載はなく、その必要もないと思われることから削除した ・規則適用に変更はない
	5.07(a) (2)【原注】	<ul style="list-style-type: none"> ・セットポジションの姿勢からwindup positionで投球することを可能とする改正 (2017 年 OBR 改正) ・このような投球を『ハイブリッドポジション』と称する ・原則、各打者が打席に入る前にこのような投球をする場合は審判員 (球審) への口頭による申告が必要 ・ただし、攻撃側プレーヤーの交代 (打者・走者) または走者の位置が変わった場合には、そのタイミング (次の投球前まで) に限

		<p>て申告することは認められる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これらの申告時は『タイム』をかけないこととする ・申告を受けた球審は明確なジェスチャーで他の審判員、プレーヤー、ベンチのチーム関係者等に周知する ・【注6】として、その逆となる『すでにワインドアップポジションの申告中から、通常のセットポジションに戻す』ということについても規定を加えた(申告中に走者の位置が変わるなどして、ワインドアップポジションでの投球が不要となることに配慮) ・【注7】として、アマチュア野球では【注6】で手当てした『セットポジションに戻す』際も審判員(球審)に口頭でその旨の申告を必要とする規定とした
5	5.07(d)	<ul style="list-style-type: none"> ・塁への送球に関する表記の修正 ・『準備動作』という文言を『ストレッチ』に統一することとした
6	5.09(b)(7)	<ul style="list-style-type: none"> ・走者がフェアボールに触れた場合の規定(2019年OBR改定) ・本規定は6.01(a)(11)の内容と同様であり、OBRのと通りの記述に書き改めた ・5.09(b)(7)本文の内容に関する解釈の変更ではない ・ただし、本項【注2】として統合された「ベースに触れて反転したフェアボールに走者が触れた場合」の取り扱いにつき、『ファウル地域』にいた走者であっても、この走者は「アウト」となる解釈に改められた。<u>(走者の位置に関係なく「アウト」となる)</u>
	5.10(l) 【原注】	<ul style="list-style-type: none"> ・監督・コーチが投手のもとに行ける回数(1イニングに同一投手のもとへ行くことができる制限)の規定 ・2019年にOBRで改正され、【原注】の内容が追加された ・投手交代があったとしても、その投手が試合から退くか否かに関係なく「1回のカウント」となる考え方 ・監督・コーチが投手のもとへ行くにあたり、投手のもとに行ってから球審にその投手の交代(=ベンチに退く)が告げられても、形式的には1回のカウントをすることになるが、その投手は試合から退くことになるため、その投手に対する『1回カウント』は直ちにリセットされることになる ・しかし、その投手がベンチに退かずに他の守備位置へ移動する場合、つまり監督・コーチが投手のもとに行ってから球審にその投手の交代(=他の守備位置に移る)が告げられた際は、この投手に対して『1回カウント』を保持した状態で他の守備位置につくこととなる(これは先に球審に他の守備位置に移る旨を告げた場合も

		<p>同様である)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その後、同じイニングにおいて、交代した新たな投手のもとへ監督・コーチがこの投手のもとへ行くことは、同一投手ではないため許されるが、例えばワンポイントで再び投手に戻ってきた場合、その後に監督・コーチは2度行くことはできないため、ここで行ってしまえば、この投手は自動的に試合から退くことになる
8	6.01(a) (8)	<ul style="list-style-type: none"> ・ベースコーチの違反行為に関する表記の修正 ・規定内本文の2か所について、OBR原文の記述にあわせて、より適切な表現に書き改めた ・規則適用に変更はない
9	6.01(h)	<ul style="list-style-type: none"> ・オブストラクションに関する規定の配列・表記の修正 ・OBRで記載されたとおりの配列および表現に見直しを行なったもの ・定義50(オブストラクション)にある【原注】を【6.01h 原注】にそのまま移動 ・規則適用に変更はない
10	6.02(a) (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・ボークに関する表記の修正 ・上記「3」と同様、OBR記載のとおり of 文言とした ・規則適用に変更はない
11	3.02(a)	<ul style="list-style-type: none"> ・バットに関する表記の修正 ・『プロ・・・』の文言を削除もしくは『NPB』と整理した ・表記の『規則委員会』についての定義を凡例の中に加えることとした(プロ野球:NPB野球規則委員会、アマチュア野球:アマチュア野球規則委員会) ・【注】の記述を簡素化
12	3.02(d)	<ul style="list-style-type: none"> ・着色バットに関する表記の修正および【3.02注】の新設 ・上記「11」と同様、『プロ・・・』の文言削除 ・プロ野球およびアマチュア野球での取り扱いを1つの【注】に整理した ・【3.02注】として、6.03(a)(5)に抵触するバット以外の非公認バット、認められていない着色バット等の使用に関する処置を明文化した
13	3.03(j) 【注1】	<ul style="list-style-type: none"> ・ユニフォームに関する表記の修正 ・上記「11」と同様、『NPB』と書き改めた
14	3.08	<ul style="list-style-type: none"> ・ヘルメットに関する表記の修正 ・上記「11」と同様、『プロ・・・』の文言削除

		<ul style="list-style-type: none"> ・メジャーリーグという表記も削除
15	3.09	<ul style="list-style-type: none"> ・商業的宣伝に関する表記の修正 ・上記「11」と同様、『プロ・・・』の文言削除 ・【注4】をプロ野球およびアマチュア野球での取り扱いが整っていることから、我が国として1つにまとめる表記に改めた
16	4.03(e)	<ul style="list-style-type: none"> ・一時中断した試合に関する規定の【注】を新設 ・たとえ30分を経過しなくとも、試合の再開が不可能であると判断できれば、その試合の打ち切りが可能
17	5.08(b) 【注】	<ul style="list-style-type: none"> ・最終回裏、満塁、打者四球等で決勝点となる状況に関する規定（【注】の改正） ・次塁に進んで触れる義務を負う走者は三塁走者および打者走者 ・それぞれの走者が 次塁に進もうとしない場合、審判員は適宜な時間がたてばアピールを待つことなく『アウト』の宣告はできる（従来通り） 次塁に触れ損なった場合、この改正により、審判員は守備側のアピールがなければ『アウト』にすることはできなくなった。つまり守備側のアピールがあってこれを認めたときに『アウト』を宣告する
18	5.10(e)	<ul style="list-style-type: none"> ・コーティシーランナー禁止規定の【注】を新設 ・アマチュア野球では出場選手の要員確保、負傷した選手の治療時間を省ける観点からコーティシーランナーの起用を認める内部規定が多いことから、本文と矛盾することを回避するために手当てを行なった
19	5.10(g) (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・投手の投球義務に関する規定の【注】を新設 ・昨年改正した『インニングの初めに登板する投手に関する投球義務』について、本文では『準備投球を行なった』ときとなっており、準備投球を開始してしまえば、第1打者（代打者を含む）の打撃を完了しなければならないことになっている ・その後、MLBでは本規定の基準を『ファウルラインを越えたとき(5.10(i))』で運用しており、NPBもすでに対応している ・今回【注】を手当てし、『準備投球を行なったとき』から『ファウルラインを越えたとき』に基準を改めた ・つまり、インニングをまたぐ投手がインニングの初めに投手板へ向かってファウルラインを越えてしまえば、従来は第1打者に代打者が出た場合、その代打者に対して打撃を完了させる義務はなかったのだが、本改正によって、代打者であっても打撃を完了させる

		義務が生じることになった
20	5.10(k) 【注2】	・ベンチに入ることが許される者に関する【注】の表記の修正 ・【注2】の表現を簡素化して整理
21	5.10(l)	・監督・コーチが投手のもとに行くことに関する表記の修正 ・上記「11」と同様、『プロ・・・』の文言削除
22	7.02	・サスペンデッドゲームに関する規定 ・昨年、大幅に見直しされた本条については、末尾に【7.02注】として、各所属団体の規定に従う旨の記載とした ・NPBではサスペンデッドゲームを採用していないため、ここでの表記をプロ野球は【7.02注1】、アマチュア野球は【7.02注2】として、それぞれ分けることとした
23	8.01(b)	・審判員の権限に関する表記の修正 ・上記「11」と同様、『プロ・・・』をアマチュア野球含めた適切な文言に書き改めた
24	9.22	・(記録)各最優秀プレイヤー決定基準に関する【9.22注】の表記の修正 ・上記「11」と同様、『NPB』と書き改め、イースタン・リーグおよびウエスタン・リーグを『ファーム・リーグ』と1つにまとめた
25	定義38 クイックピッチ	・(2)「クイックリターンピッチ」の「リターン」について、5.07(a)(2)【原注】や6.02(a)(5)【原注】は「クイックピッチ」とあり、どちらも同じ意味であることから表記を「クイックピッチ」で統一した
26	定義64 クイックリターンピッチ	・上記「25」と同様の考えから「リターン」を省くこととした
27	その他 (凡例関係)	・規則書巻頭『凡例』の項目にある『打者走者』、『打者』の表現を改めて見直ししたもの ・これにより、『凡例』に記載する必要がなくなったため、上記に関する項目を削除した

2026年 競技者必携改訂について（訂正版）

技術委員会

（ ）は2026年 競技者必携掲載頁

1. 投手の12秒及び20秒ルールの運用基準（9頁、10頁）

1. 12秒及び20秒ルール

投手は、走者がいない場合には12秒以内、走者がいる場合には20秒以内に投球に関連する動作 投球動作を開始しなければならない。

規則適用上の解釈(9)(69P 参照)

※掲載内容の一部に表現の不備があったため、以下の通り訂正します。

誤) 「投球に関連する動作」 → 正) 「投球動作」

4. 20秒ルールの適用

C) ボールインプレイの状態、打者がバッタースボックス内で 打者に面したとき。(削除)

2. 試合のスピード化・マナーに関する確認事項（15頁、16頁）

4) 打者

②打者はみだりに・・・(サインは必ず打者席内で見ること)。

アマチュア野球内規 ②バッタースボックスルール（88P 参照）を理解し、これを実行すること。(追加)

④四球の走者が保護具（レッグガード、エルボーガード、その他）を外すときには、本塁周辺で外し一塁へ向かうこと（ヒットバイピッチの時も同様とする）。(新規)

3. シートノックの(5)を削除し、サイドノックの実施について新規に掲載（本文参照）(35頁、43頁)

4. 15 打者が頭部に・・・できる。(36頁)

臨時代走者は、・・・9人の中から打順の前位の者を代走者と認めて試合を進行する（ただし投手及び投手兼任のDHを除く）。

5. 競技に関する連盟特別規則の2 延長戦(2)上記以外の連盟が主催する大会を、(2)高松宮賜杯大会、東・西日本1部2部大会、(3)中部日本大会、東・西日本選手権大会にそれぞれ分けて掲載（本文参照）(39頁)

6. 学童部、少年部、女子大会における監督、コーチの年齢を 20 歳以上から 18 歳以上へ変更。
(42 頁)
7. 学童部 (女子共) 並びに少年部 (女子共) の 6 監督がグラウンドに出て指示することができるという箇所を削除。(2025 年 43 頁、48 頁)
8. 学童部並びに少年部の投球数制限について (48 頁、49 頁、53 頁)
【学童部 (女子共)】
④ 1 週間の投球数は 210 球以内とする (4 年生以下は 180 球以内)。・・・(新規)
【少年部 (女子共)】
④ 1 週間の投球数は 350 球以内とする。なお、投球数のカウントは、該当期間中の試合における実際の投球数の累計によって行う。(追加)
【投球数管理運用】
③ 12 秒または 20 秒が経過し、タイムが宣告されたにもかかわらず、投球した場合は投球数に入れる。(新規)
9. 試合中の禁止事項 (57 頁、58 頁)
1 競技前、中、後を問わず、相手側プレーヤーや審判員に手をかけたり、暴言を吐いたり、侮辱する言動を厳禁する。(変更)
3 競技場内・・・〈中略〉ことを禁止する。また、喫煙可能な場所であっても、ユニフォームを着用しての喫煙は禁止とする。(新規)
5 投手が手首や・・・〈中略〉。なお、負傷等の応急処置として、テーピングなどの使用を認めることがある。この場合、担当審判員の許可を得ることとする。但し、投球に影響を与えるものを直接ボールに触れる箇所には使用できない。(変更)
9 プレイを利用して相手選手を欺く行為に例①②を (追加) (本文参照)
10. 試合のスピード化に関する事項 (59 頁、61 頁)
1 守備側のタイムの回数制限
(1) 監督またはコーチ等が 1 試合に・・・〈中略〉。この際、投手 (内野手含む) にペットボトルやタオルを持参することができる。ただし、選手を帯同させることはできない。(追加)
- 10 打者について
(1) 打者は、アマチュア野球内規 ②バッタースボックスルール (88P) を理解し、これを実行すること。(新規)
(3) 打者がたとえば判定に不服で、あるいは攻撃側のサイン交換が異常に長くて、球審の督促にもかかわらず、なかなかバッタースボックス内で打撃姿勢をとろうとしなかった場合、球審は投手に投球を命じることなく自動的にストライクを宣告する。この場合は・・・〈中略〉。(変更)

11. 用具・装具に関する事項 (64 頁)

7 アイブラック (アイパッチ) の使用を認める。(新規)

12. 規則適用上の解釈 (69 頁、73 頁、74 頁、76 頁)

(9) 投手の投球当時とは、投手が打者への投球に関連する動作投球動作を起こしたときをいう。

セットポジションの際の“ストレッチ (準備動作)”は投球に関連する動作投球動作とはみなさない。(野球審判員マニュアル 第5版 57P 参照)

※掲載内容の一部に表現の不備があったため、以下の通り訂正します。

誤) 「投球に関連する動作」 → 正) 「投球動作」

(28) 投球の義務 (規則 5.10(g)(i) 関連) 【先発投手】 【救援投手】 【継続中の投手】 に分けて掲載した。(本文参照)

(33) 試合に出ているプレーヤーの代走 (臨時代走) が認められる場合

(1) (2) 投手及び投手兼任の DH を除いた . . .

13. アマチュア野球内規 (2026 年) (87 頁)

③ ワインドアップポジションの投手及び⑬ 正式試合となる回数を削除。

14. 質疑応答 (119 頁、123 頁、141 頁、171 頁)

62 答 走者をアウトにしようとする一連の動作で右投手が三塁 (左投手が一塁) へ振り向き、踏み出して送球することは正規の動きであるので差し支えない。(5.07a (1) 【原注 2】 ②)

78 答 ワインドアップポジションでもセットポジションでも、投球に関連する動作投球動作を起こす前なら、投手板に触れたまま、走者のいる塁に送球しても差し支えない。(5.07a (1) 【原注 2】 ②) 5.07d、6.02a (1)(4))

※掲載内容の一部に表現の不備があったため、以下の通り訂正します。

誤) 「投球に関連する動作」 → 正) 「投球動作」

146 答 フェア地域またはファウル地域に関係なく走者はアウトになる。(5.09b (7) 【注 2】)

69 答 ボークではない。しかし、投手が自由な足を踏み出さずに、対面する塁へけん制球を投げるとき、外した軸足が再び投手板につけばボークとなる。(5.07 (a)(2) 【注 5】)

15. 審判上の取り決め事項ならびに注意すべき規則 (217 頁、220 頁、224 頁、225 頁)

1、宣告の取り決めの 1 と 2 を削除。

8、ハーフスイングの際の、チェックスイングの要請

なお、バントは定義上スイングではない、となっているが、アマチュア野球 (軟式野球)

では、バントのときでもハーフスイングのときと同様、球審は塁審にアドバイスを求めることができる。(追加)

15. 正しい投球姿勢の徹底

4 セットポジションから投球する投手は、・・・〈中略〉。その保持に際しては、身体の前
面ならどこで保持してもよいが、同一打者のときは同じ位置でなければならない。ただ
し、打者によって止める位置を変えることは構わない。(追加)

20. 投球姿勢(ハイブリッドポジション)及び申告に対するサインについて(新規)

塁に走者がいるときに、投手が投手板に軸足を並行に触れ、自由な足を投手板の前方に置いた場合、その投球姿勢はセットポジションとみなされる。

ただし、**打者が打席に入る前に、投手が「windアップで投球する」旨を審判員に申告した場合は、前述の投球姿勢であったとしてもwindアップポジションとして投球することができる。**(5.07(a)(2)②【原注】、【注6】、【注7】)

【球審のサイン】

- ① セットポジション → ハイブリッド姿勢によるwindアップポジションへの申告があった場合、球審は、「**両手を身体前面で合わせ、頭頂部へ振りかぶる動作**」をジェスチャーで示す。
- ② ハイブリッド姿勢によるwindアップポジション → セットポジションへ戻す申告があった場合、球審は、「**両手を身体前面で合わせ、そのまま保持する姿勢**」をジェスチャーで示す。

※上記のジェスチャーが球審の基本サインであるが、必要に応じて言葉を添えて示しても良い。

16. 審判員の構え、判定と宣告、ジェスチャー(227頁)

審判員は、すべてのプレイを見たままに正確に判定して、宣告する義務があります。そのため、「審判メカニクス・ハンドブック」に基づき、アマチュア野球規則委員会が各種資料を発行していますので、審判技術の向上に活用して下さい。

よって、競技者必携の試合の開始から試合の再開までの掲載を削除します。

17. 試合の開始～試合の再開を削除 2025年版(224頁～245頁)

18. 試合の終了(229頁)

○宣告用語「礼」

○宣 告

②球審の合図により全員脱帽をして、相互に礼を交わす。

19. 表記を改めた項目

打者 → 打者走者

投球動作 → 投球に関連する動作 → 投球動作

※掲載内容の一部に表現の不備があったため、以下の通り訂正します。

誤) 「投球に関連する動作」 → 正) 「**投球動作**」

肉体的援助 → アシスト

20. 本文の必ずと表記しているところを連盟規程細則にならい削除した。(35 頁、43 頁、64 頁)

21. 審判員に関する取り決め事項 4 の必ず、を削除する事に伴い文章を見直した。(215 頁)

4 試合開始前に担当審判員(控え審判員を含む)は相互のコミュニケーションを深めるために、決まりごと等の打ち合わせを行い、試合が終わったらアフターミーティングを行う。

以上

全軟野連発第 268 号
令和 7 年 12 月 15 日

都道府県支部
理事長 様

公益財団法人 全日本軟式野球連盟
専務理事 小山吉男

2029 年以降の少年部(学童・少年)バット使用制限について (通知)

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

標記の件につきまして、本連盟では、2025 年より学童部による一般用の打球部に弾性体を取り付けたバットの使用制限を導入いたしました。その後の段階的な措置として、2029 年以降より更なる「選手の安全面を考慮」することを目的に、少年部(学童・少年)における外表面上に弾性体(ウレタン・スポンジ等)を取り付けたバットの使用を全面禁止することを令和 7 年 11 月 5 日の第 4 回理事会で決定しましたので、下記のとおり通知いたします。

なお、2028 年シーズン終了までは移行期間とするため、現行ルールのまま大会運営を実施していただきますようお願い致します。

以上、何卒よろしくお願い致します。

記

■少年部(学童・少年)のバットの使用制限について

導入年：2029 年より導入 ※(2026 年～2028 年シーズン終了までは移行期間)

内 容：選手の安全面を考慮し、バット外表面にウレタン、スポンジ等の素材の弾性体を取り付けた一般用および小学生軟式用のいずれのバットの使用を禁止する。
よって、2029 年以降に使用できるバットは、木製・金属製・カーボン製・複合(金属/カーボン)となる。

■使用制限の内容および今後のスケジュールについて

別紙資料参照

以上

事務担当者：吉岡、清野 TEL：03-3404-8831

【別紙資料】 2029年以降のバット使用制限について

■ 2029年以降の使用制限

時期	内容
2025年～	2025年より、安全面を考慮し学童部では、一般用バットのうち打球部にウレタン、スポンジ等の素材の弾性体を取り付けたバットの使用を禁止としているが、 2029年より、学童部においては小学生軟式用も使用禁止とし、少年部においても外表面にウレタン、スポンジ等の素材の弾性体を取り付けたバットの使用を禁止する。 なお、上記以外のバット(木製・金属製・カーボン製・複合(金属/カーボン))については、使用制限を行わない。

■ 全軟連の考え方

- ✓ 学童部・少年部における外表面に弾性体を取り付けたバットの使用制限を行う
- ✓ 将来的に、小学生軟式用バットの基準(長さ、重量、太さ、反発)設置に向けて継続的に検討を行う
- ✓ 一般部(大人)は、特別な使用制限は行わない

■ 導入理由について

- ✓ **学童・少年部競技者の安全面に万全を期すため**

■ 今後の使用制限導入スケジュール

	2025	2026	2027	2028	2029
学童部 (小学生)	機関決定	機関決定	移行期間	移行期間	使用制限 導入
					使用制限 導入
少年部 (中学生)	機関決定	機関決定	移行期間	移行期間	使用制限 導入

(補足)

*学童部(小学生)では、引き続き一般用バットの打球部にウレタン、スポンジ等を取り付けたバットの使用は禁止であり、2029年からは更に小学生軟式用の弾性体取り付けバットの使用を全面禁止とする。(一般用・小学生軟式用共に禁止)

*少年部(中学生)では、2029年の③の導入により弾性体取り付けバットの使用を全面禁止とする。

令和8年2月21日

学童部における変化球禁止の徹底について（通知）

1. はじめに

平素より、学童野球の健全な運営と安全確保にご尽力いただき、厚く御礼申し上げます。
当連盟では、学童期の肘・肩の障害防止を最優先とする観点から、学童部における変化球の投球禁止を明確に定めています。これは、子どもたちが将来にわたり野球を安全に楽しめる身体づくりを守るための重要な取り組みです。

しかし近年、一部の現場において、名称を変えつつ実質的に変化を伴う投球が行われている事例が確認されています。

2. 禁止対象となる投球の例

以下のような投球は、名称にかかわらず「変化球」とみなします。

- 手首を捻らないチェンジアップ
- フォークボール（落ちる球種）
- その他、意図的に変化を生じさせる投球全般

これらは、投球動作への負担、禁止趣旨の逸脱、公平性の阻害につながるため、当連盟として看過できません。

(注) なお、ボールに変化を与えないスローボールは変化球とはみなしません。

スローボールとは、ストレートの握りで、腕の振りや投球動作による緩急をつけて投げるものであり、球に変化を与えるものではありません。

ただし、スローボールであっても、カーブ回転・スライダー回転がかり、変化していると疑われる場合には注意・指導を行ってください。

3. 変化球禁止の目的

- (1) 成長期の身体を守ること
- (2) 正しいフォーム習得を優先すること
- (3) スポーツマンシップを育むこと

学童期は、「野球を好きになること」「仲間と協力すること」「怪我をしない身体をつくること」を学ぶ大切な時期です。

4. 審判員に求める判断と責務

審判員は、以下の基準に基づき判断してください。

- 球種名ではなく、投球動作および実際の変化で判定すること
- 変化球と判断した場合は、『競技者必携』に基づき規定を適用すること

※これは審判員の裁量ではなく、当連盟が定める統一運用ルールです
指導者・選手・保護者の説明に左右されず、審判員自身の判断を優先してください。

5. 現場での具体的対応

- 変化球と判断した場合は、『競技者必携』に基づき規定を適用する
- 変化球と判断した場合、または変化球が疑われる場合は、指導者、投手、捕手に対して注意・指導を行う
- 判定後は、簡潔かつ冷静に理由を伝え、競技の円滑な進行を確保する

6. 自然な変化への理解

学童期は身体発達の途中であり、投手経験の浅い選手も多いため、意図せず球が変化して見える場合があります。これは自然現象であり、変化球とは区別して判断する必要があります。

(1)手の大きさによる影響

- ボールを深く握りやすく、回転が安定しにくい
- 指の長さ・力の差により、無意識に横回転・斜め回転がかかる
- リリースが安定せず、抜け球・引っかかりが生じやすい

(2)経験不足による影響

- 正しい握りやリリースの感覚が未確立
- 下半身主導の投球が身につかず、腕の振りに依存
- 力の入れ方が一定でなく、抜け球・引っかかりが起こりやすい

上記を踏まえ、準備投球の段階から投手の動きを注意深く観察するように努めてください。

7. おわりに

学童期において最も重要なのは、「身体を守ること」と「野球を楽しむこと」です。

変化球禁止の趣旨については、競技者必携「変化球に関する事項」を提示のうえ、抽選会・監督主将会議・オーダー表交換時などの機会を活用し、指導者・選手等への啓発を含めて徹底し、全試合で統一した判断を実行してください。

子どもたちの未来を守るため、当連盟として厳正な運用を求めます。

以上

2026年以降の大会運営に係る変更点について(一覧)

No.	カテゴリー	項目	内容	導入時期
1	少年部 (学童・少年)	少年部における敬称略について	試合中の選手アウンスは、全て敬称略とする。 ※「くん」・「さん」の廃止。	2026年(令和8年)から導入
2	少年	試合時間の見直し	健康面を考慮し、試合時間を2時間とする。 ※ 旧) 2時間30分 ⇒ 新)2時間	2027年(令和9年)から導入
3	学童	同一試合での投手と捕手の兼任 禁止	投手にかかる肘肩の負担は大きいことは明白であるが、同様に捕手も肘肩への負担が大きいが、ジションの一つであることを考慮し、同一試合中において投手と捕手の兼任を禁止する。 【適用ルール】 障害予防により、投手または捕手で出場した選手は、同一試合中において、投手が捕手につくことや捕手が投手につくことを禁止する。但し、他の守備位置につくことはできない。 なお、投手が捕手以外の守備位置につき、再び投手に戻ることはできない。捕手も同様に投手以外の守備位置についてから再び捕手に戻ることはできる。	2027年(令和9年)から導入

試合のスピード化・マナーに関する確認事項

技術委員会

選手・審判員個々が強く意識し行動することが、野球競技をより楽しく面白く発展させると確信します。テンポの良いゲームを展開しましょう。

1) チーム

- ①攻守交代は、駆け足でスピーディーに行うこと。(コーチも励行する)。
- ②日程・時間に余裕がある場合でもスピーディーな試合進行を意識すること。
- ③ベンチ前の整列は、出過ぎないこと。プレイのコールを待たせないこと。
- ④投手が投手板に触れて投球位置にいたら、投手の動揺を誘う声を発しない。

2) 投手

- ①遅延行為とみなされる投手のけん制球はやめさせること。
- ②投手の基本的なルールを徹底させて下さい。
- ③投手は、ロジンバッグを指先だけで使用し、丁寧に扱うこと。
- ④捕手から返球を受けた投手は、速やかに投手板に着き投球動作に入ること。

3) 捕手

- ①捕手は、返球したり声をかけるためにホームプレートの前や横に出過ぎないこと。
- ②サインについて、複雑なものは無くし、速やかに出すよう指導すること。
- ③捕手の行動を機敏にさせること。

速やかなサイン・用具の脱着・バックアップや打合せの後、速やかに守備位置に戻る。

4) 打者

- ①攻撃側の第一打者・次打者を所定の位置に速やかに着くよう喚起すること。
- ②打者はみだりに打者席を外さないこと。(サインは必ず打者席内で見ること)
- ③次打者席では、投手が投球に関連する動作(サインを見る姿勢)に入ったら速やかにスイングをやめ投球を注視すること。

競技者のマナーに関する事項

マナーアップとフェアプレイの両面から、次のような行為を禁止する。

- 1 捕手が投球を受けたときに意図的にボールをストライクに見せようとミットを動かす行為
- 2 捕手が自分で「ボール」、「ストライク」を判定するかのようには、球審がコールする前にすぐミットを動かして返球態勢に入る行為
- 3 球審の「ボール」の宣告にあたかも抗議するかのようには、しばらくミットをその場に置いておく行為
- 4 打者がヒジ当てを利用してのヒット・バイ・ピッチ(死球)狙いの行為
- 5 打者がインコースの投球を避ける動きをしながら当たりによろしく行為
- 6 野手が走者の視界を遮る行為(規則6.01h(2))
 - (1) 走者がタッグアップしているとき、野手が走者の前に立ち視界を遮る行為
 - (2) 野手が走者の前に立ち、ボールを保持している投手板上の投手への視界を遮る行為
- 7 その回の先頭打者は、準備投球が終わるまで次打者席で待機すること
- 8 投手が投手板に触れて投球位置にいたら、投手の動揺を誘うような大きな声を発しないこと
- 9 学童部・少年部の試合においては、ベンチ内の大人がいかなる状況であつても、選手を萎縮させるような言動を禁止する

投手の 12 秒及び 20 秒ルールの運用基準

技術委員会

1. 12 秒及び 20 秒ルール

投手は、走者がいない場合には 12 秒以内、走者がいる場合には 20 秒以内に投球に関連する動作を開始しなければならぬ。
違反した場合、球審はただちにボールを宣告する。
以下に、「計測」「12 秒及び 20 秒ルールの適用」について示す。

2. 計測

計測は二塁塁審がストップウォッチを持って行う。(3 人制は三塁塁審)

3. 12 秒ルールの適用

- ① 走者がいない場合に適用する。
- ② 12 秒の計測は、投手がボールを所持し、打者がバッタースボックスに入り、投手に面したときに始まり、投手が投球に関連する動作を開始したときから始まる。
※審判員は 5.07(C)(1)(2)について、チームに正しく指導し厳守させること。
で大きく手首を叩いて球審に 12 秒が経過したことを知らせる。
※二塁塁審 (三塁塁審) のタイムの宣告と同時にボールデッドとなる。
※タイムの宣告にもかかわらず投手が投球した以後のプレイは無効とする。
学童部、少年部については投球数に入れる。
- ③ 12 秒を経過したとき、二塁塁審 (三塁塁審) は「タイム」を宣告し、頭上球審は投手及び守備側の監督に 12 秒ルールの適用したことを告げる。

4. 20 秒ルールの適用

- ① 走者がいる場合に適用する。
 - ② 20 秒の計測は、次のときに始まり、いずれの場合も投手が投球に関連する動作を開始したときに終わる。
 - A) イニングが始まるときやボールデッドになったときは、球審がプレイを宣告したとき。
 - B) ボールインプレイの状態、新しい打者が打撃を開始するときや、打者がバッタースボックスの外に出ざるを得なくなるときなどは、投手がボールを所持し、打者がバッタースボックスに入り、投手に面したとき。
 - C) ボールインプレイの状態、打者がバッタースボックス内で打撃を継続しているときは、投手が捕手や他の野手からボールを受け取ったとき。
※審判員は 5.07(C)(1)(2)について、チームに正しく指導し厳守させること。
 - ③ 20 秒を経過したとき、二塁塁審 (三塁塁審) は「タイム」を宣告し、頭上で大きく手首を叩いて球審へ 20 秒が経過したことを知らせる。
※二塁塁審 (三塁塁審) のタイムの宣告と同時にボールデッドとなる。
※タイムの宣告にもかかわらず投手が投球した以後のプレイは無効とする。
学童部、少年部については投球数に入れる。
 - ④ 二塁塁審 (三塁塁審) の知らせを受けた球審は、ボールを宣告する。その際、球審は投手及び守備側の監督に 20 秒ルールの適用したことを告げる。
 - ⑤ 投手が塁に牽制球を送球したときは、20 秒の計測をリセットする。
※投手板をはずしただけのときや偽投のときは、計測を継続する。
※送りバントのケースなど、捕手が内野手にサインを出している間も、計測は継続する。
- 以上



第51回 全国審判技術研修員講習会での新たな指導事項

1. バッターボックスルールを選手に理解してもらう(打者にペナルティ)

【目的】

- (ボール)
- ・ゲームのスピードアップ(20秒ルールも1回目からペナルティをとることになった)

【ケース】

- ・打者は、バッターボックスルールを理解していないケースが多く、投球後、不用意にバッターボックスを離れるケースが散見される。

【処置】

- (打者の両足がボックスから出たら警告を発する。片足だけなら注意のみ)
- ・「タイム」をかけ、両手人差し指を自身の顔の前で、四角(バッターボックス)を描いて、「バッターボックスルール」「警告1回目」と注意をする。
 - ・警告は1試合での関さんになり、3回目の違反を犯した場合は、ボールデットにし「ストライク」とコールし、カウント表示を行う。2ストライク後の場合は、三振。

【ゲームコントロール】

- ・バッターボックスルールに抵触する場合は、思い切って本ルールの適用をする。結果的に、チームへの警告の意味もある。

→クルーで塁審もメモをとりながら対応すること。

<バッターボックスルール> 【規則書5.04(b)(4) 必携P.82】

- ・打者は打撃姿勢をとった後は、次の場合を除き、少なくとも一方の足をバッターボックス内に置いていなければならない。この場合は、打者はバッターボックスを離れてもよいが、“ホームプレートを囲む土の部分”を出てはならない。
 - (i) 打者が投球に対してバットを振った場合
 - (ii) チェックインが塁審にリクエストされた場合
 - (iii) 打者が投球を避けてバランスを崩すか、バッターボックスの外に出ざるを得なかった場合
 - (iv) いずれかのチームのメンバーが「タイム」を要求し認められた場合
 - (v) 守備側のプレイヤーがいずれかの塁で走者に対するプレイを企てた場合
 - (vi) 打者がバントをするふりをした場合
 - (vii) 暴投または捕逸が発生した場合
 - (viii) 投手がボールを受け取った後マウンドの土の部分から離れた場合
 - (ix) 捕手が守備のためのシグナルを送るためにキャッチャーボックスを離れた場合